

歴史と伝統息づく塩の国・赤穂

製塩工場を訪ねて

<2>

かつて「塩の国」と言われた赤穂。製塩の歴史は弥生時代まで遡るといわれ、江戸時代には千種川東西に広大な入浜塩田が広がり、良質な塩産地として全国的に知られていた。現在も日本を代表する塩の産地ブランドであることに変わりはない。「イオン膜・立釜法」工場紹介の第2弾として日本海水赤穂工場を取り上げる。

日本海水赤穂工場



赤穂工場外観

の、美商売ベースでは赤穂が先陣を切ってスタートさせている。昭和47年には年産15万t工場を完成させ、イオン交換膜製法による製塩第1号許可証を取得した。

前回(5月26日掲載)ある。つまり小名浜は試みのシリーズ第1回で、日産100tの試験生産を早かったもの本海水小名浜工場が世界初のイオン交換膜製法実用化工場であることを紹介したが、実のところ同法による商業運転が最も早かったのが赤穂工場

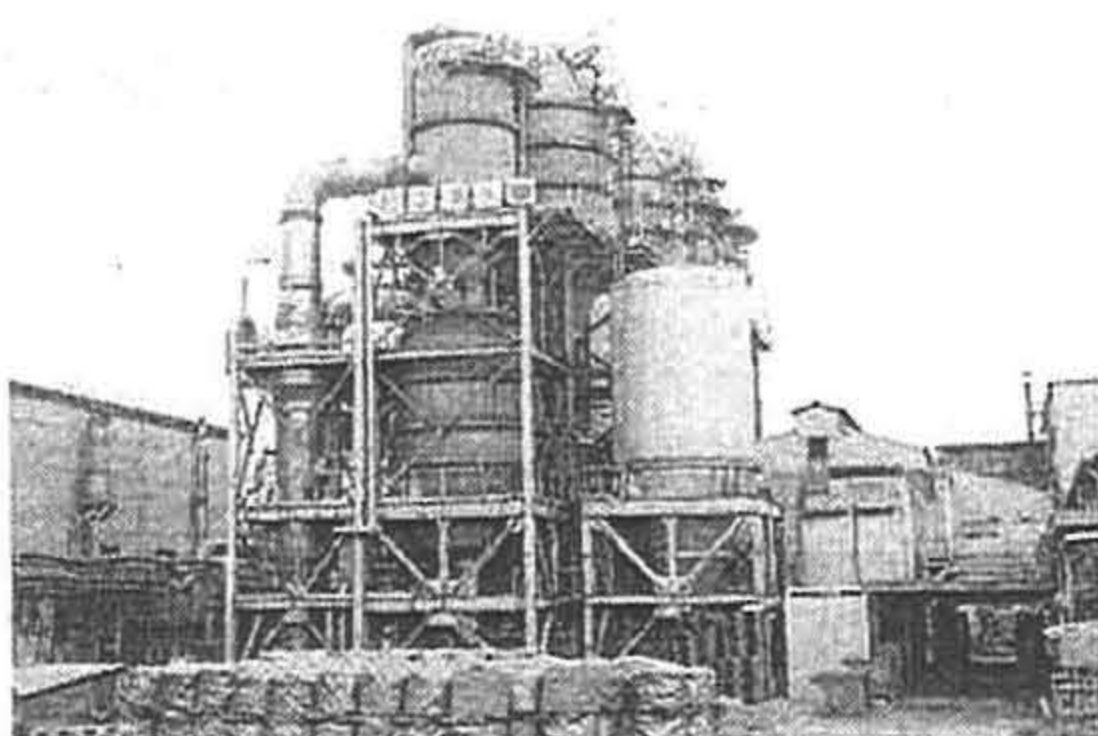


塩崎工場長

これら歴史的背景をも作用している。平成20年度の実績は18万6千t。瀬戸内4工場では最大の出荷量を誇る。うち山陽・関西地区向けの出荷量が約半分を占めている。赤穂での近代製塩の成立には、大消費地である山陽・関西地区に密着した立地優位性も

山陽・関西地区に安定供給

作用している。平成20年度の実績は18万6千t。瀬戸内4工場では最大の出荷量を誇る。うち山陽・関西地区向けの出荷量が約半分を占めている。赤穂での近代製塩の成立には、大消費地である山陽・関西地区に密着した立地優位性も

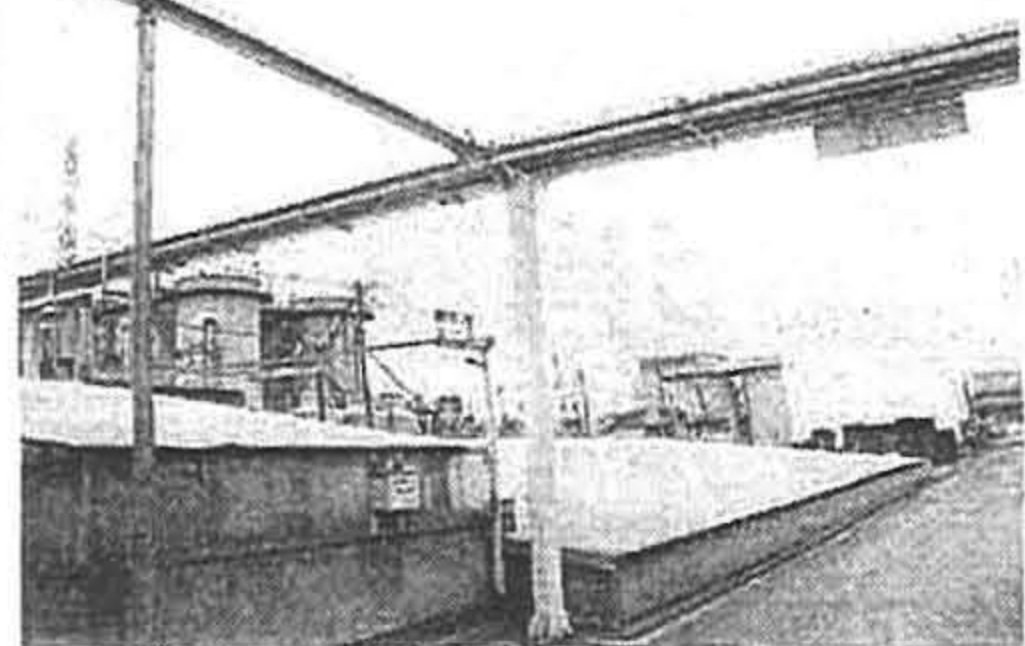


順次更新を進める煎ごう設備



トラックにじか積みする貯塩バンカー設備

係していると思われる。すなわち、この地に先祖代々脈々と刻まれてきた塩づくりの精神が、どんな時代になっても全国津々浦々へ安定した品質の塩を安定供給する責務として受け継がれているのではないだろうか。



タテホに蒸気供給する管

を予定するなど品質向上とコスト削減の両立を図っている。今年度は品質保証体制を充実させるため組織変更が行われた。製造本部の直轄組織として品質保証部を独立化し、ソフト面の管理強化も推進することにした。品質保証部はこれまで工場長直轄のセクションだったが、3工場の横断的な部門として新組織の利点を話す。

兄弟タテホとシナジー探る

今後の取組。もともとタテホ化学組は、下期から工場同士を隔てから塩化カリウム製造設備を立ち上げ、塩化カリウムは農業に不可欠な3大肥料成分の1つであり、日本ではそのほとんどを海外からの輸入に頼っている。最終的にはAW傘下に収められた。タテホとの連携強化は「AWグループではお互い海水事業という互いに協力し、効果を発揮できるように」と話す。